探究科目に向けた「考えさせる歴史教育」構築の必要性

――江戸時代における「参勤交代制度化の目的」の考察を通して

本保 泰良

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』の第２章（地理歴史科の各科目）第４節に「日本史探究」に関する記述がある。その中の「２　内容とその取扱い」⑤には、「課題（問い）の設定と資料の取扱い」と題されて、つぎのように述べられている。「「日本史探究」では、学習全般において課題（問い）を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは、第一に課題（問い）の設定であり、第二に課題（問い）の追究を促す資料の活用である。この科目では、⑵の歴史資料と時代の展望を学習する中項目に限らず、学習全般において資料を活用することが示されている。教師が学習のねらいを十分に把握し、ねらいに則した資料を選択し提示することが重要である。また、生徒が課題（問い）を考察したり、お互いに意見を表明したりする際も、適切な資料を基に、根拠を踏まえて考察するよう、指導を工夫することが重要である」と。

私は、「課題（問い）を設定し追究する学習が求められる」の部分に強い関心を抱いた。歴史は「なぜ」を問う学問であると思う。「なぜ」「どうして」を授業の核心において取り組ませることで、今まで暗記科目だと認識していた歴史が、実は面白いものであり、かつ思考力や調査力など、これからの社会を生きていくうえで必要不可欠な能力を高めてくれる科目であることに気づくことができるのだと思う。みずから考え、グローバル社会の一員として活躍できるための素地を、歴史という科目を通して養ってほしいと強く願っている。

授業実践

〈ねらい〉　以上のような前提をふまえ、本実践では、江戸時代に参勤交代が制度化された目的を題材に、資料をもとに探究することを通して、物事の本質にせまろうとする力を涵養することをねらいとする。

中学校の教科書『新しい社会　歴史』（東京書籍、歴史705）には「参勤交代には、大名が江戸に来て将軍にあいさつし、主従関係を確認するという、重要な意味がありました」とあり、すでに参勤交代制度化の目的について知っている生徒も多いであろう。一方で、筆者の経験上、「参勤交代は、諸大名に莫大な金銀を使わせて、大名の経済力を低下させるために制度化された」といった誤った認識をもつ生徒も毎年一定数いる。

そこで、その誤解を正しつつ、参勤交代制度化の目的にせまることにしたい。

実践したのは高校１年生の「日本史Ｂ」の授業で、使用した教科書は『詳説日本史　改訂版』（日Ｂ309）である。「日本史Ｂ」の授業であるが、「日本史探究」を念頭に授業をおこなった。

〈導入〉　「参勤交代は江戸時代のいつ頃に制度化されたのか」と発問すると、ほとんどの生徒は中学校での知識から「３代将軍徳川家光の治世頃」と答えられる。ここで教科書に載せられている「武家諸法度（寛永令）」の史料を見るように指示し、武家諸法度（寛永令）は、第３代将軍徳川家光が1635（寛永12）年に発布したものであり、その中で大名には原則、国元と江戸を１年交代で往復する

参勤交代を義務付け、大名の妻子は江戸に住むことを強制されたことを確認する。

〈展開１〉 まず、あらかじめ「幕府は、諸大名に莫大な金銀を使わせて、大名の経済力を低下させるために参勤交代を制度化した」という**【仮説】**を立て、これを検証するところから始める。

生徒たちに、武家諸法度（寛永令）の現代語訳を配布し、それを見るように指示する。

> 【武家諸法度（寛永令）】
> 一　大名小名、在江戸交替、相定ル所也。毎歳夏四月中参勤致スベシ。従者ノ員数近来甚ダ多シ、且ハ国郡ノ費、且ハ人民ノ労也。向後其ノ相応ヲ以テ、之ヲ減少スベシ。……
> 【現代語訳】
> 一　大名・小名が国元と江戸とを参勤交代するよう定めるものである。毎年夏の四月中に江戸へ参勤せよ。しかし、参勤に来る大名の供の者の人数がたいへん多くなっている。これは治めている国や郡の無駄な出費であり、人々の苦しむところとなる。これからは供の人数をよく考えて減らすことが必要である。……

参勤交代制度化の目的が、**【仮説】**通りだとした場合、武家諸法度（寛永令）と明らかに矛盾するところがあることに気づかせるため、この史料で重要であると思ったところに下線を引くように指示する。その後、グループになって、ほかの生徒となぜその箇所に下線を引いたのかについて話し合わせる。

すると、クラスのほとんどの生徒は、参勤交代制度化の目的が、「諸大名に莫大な金銀を使わせて、大名の経済力を低下させるため」なのであれば、武家諸法度（寛永令）に参勤交代のための出費削減を明記するであろうか、ということに気づく。諸大名に莫大な金銀を使わせることと、武家諸法度（寛永令）の文言は明らかに矛盾するのである。したがって、**【仮説】**は否定され、ここで生徒たちは参勤交代制度化の目的を改めて考えることになる。

〈展開２〉 ここで２つの問いを提示し、グループワークをさせる。

［問い］

①本格的な武家社会が始まった鎌倉時代から江戸時代までにおいて、主人と従者のあいだには常に「御恩」と「奉公」の関係が存在している。「御恩」に対する「奉公」とは、具体的にどのようなものであったのか。

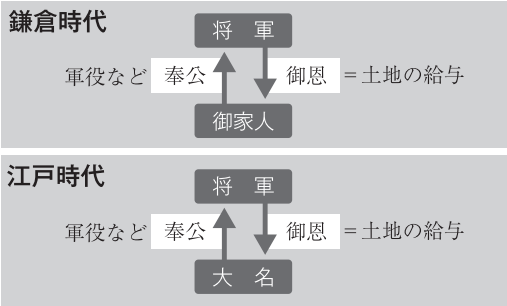
②武家諸法度（寛永令）が発布されたのは、1635（寛永12）年である。これ以降に島原・天草一揆という大規模な戦いがおこってはいるが、原則として1614（慶長19）年～1615（元和元）年にかけておこった大坂の役が終わりを告げると、これ以降は元和偃武と呼ばれる平和な時代が訪れた。江戸時代は、天下泰平が長く続いた時代であったが、このことは従者としての大名が果たすべき「奉公」にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

４～５人のグループをつくらせ、［問い］をもとに10～15分程度話し合わせる。グループで意見をまとめさせ、各グループで選出された代表者がグループの意見を黒板に書いて、全体で共有する。①は教科書に記載があり、比較的容易に正答（軍役）にたどり着くが、②については、「平和な時代」と「奉公」の関係性に気づけず、なかなか正答にたどり着けない。

［解説］

生徒たちは「封建制度」という用語を知っている。この制度は、土地の給与を通じて、主人と従者が「御恩」と「奉公」の関係で結ばれるものであり、この封建制度にもとづいて成立した最初の政権が鎌倉幕府であったことを説明する。本格的な武家社会は鎌倉時代より始まり、室町時代・戦国時代・江戸時代へと引き継がれていく。時代は変遷していっても武家社会であることにはかわりがなく、武家社会における主人と従者の関係は、すべて「御恩」と「奉公」の関係で成り立っていることを確認させ、各時代の主従関係のあり方を生徒たちに図

化することで視覚情報としてとらえさせる。ここで理解させたいことは、例えば鎌倉時代と江戸時代という、一見まったく異なる時代であっても、主従関係の仕組みは変わらないということである。



鎌倉時代から江戸時代までの武家社会は、将軍の家臣としての従者の名称こそ異なるが、封建制度としての仕組みはどの時代も同じである。授業で生徒に理解させたいポイントは、鎌倉時代であれ江戸時代であれ、武家社会である以上、将軍は「御恩」として家臣に土地を与え、土地を与えられた家臣はこの「御恩」に対して必ず「奉公」を果たす義務を負っているということである。そしてこの「奉公」の基本は、軍役であることに気づかせる。

ここで、教科書に載せられている「大名の配置」を生徒たちに見るように指示して、この図は一体何を示しているのかと発問する。

生徒からは、「各大名の名前の隣の数字は石高を示しているので、大名の経済力を表している」などとの発言がある。さらに深めさせるべく、「この数字は将軍から大名に対する何を示しているのか」と発問を続ける。生徒の中には、「将軍から大名に対する御恩の大きさ・量を示している」との解答にたどり着く者もいる。「御恩」である石高数が多ければ多いほど、果たさなければならない「奉公」の量も多いということになる。参勤交代においては、大名が将軍によって所有を認められた石高数に応じて、「奉公」としての軍役を果たす際に同行させる供の者の数や携帯するものの数などが決定されていく。ここで確認させたいことは、「御恩」の大きさによって「奉公」の程度がかわるということである。例えば、加賀藩の前田家は100万石以上を所有する大名であるわけだから、果たすべき「奉公」も相当なものにおよぶのだな、と生徒には認識して欲しいのである。

ここで**図1・2**（全体図は**巻頭図版**参照）を示し、「御恩」に対する「奉公」の量を視覚的に認識させる。石高約1万石の牛久藩と100万石以上の加賀藩の従者の規模の差は一目瞭然である。

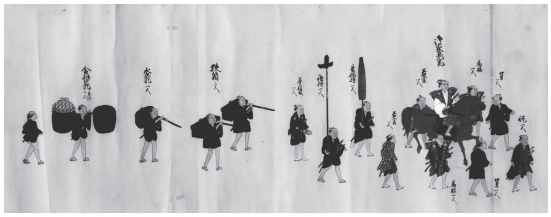


図1　牛久藩大名行列図巻（牛久市教育委員会蔵）

図2　加賀藩大名行列図屏風（石川県立歴史博物館蔵）

さらに**表1**を示し、石高数に応じて、供出する従者の数が「増減する」ことを数字でも確認させる。

藩の石高	馬上	足軽	中間人足
1万石	3～4（騎）	20（人）	30（人）
5万石	7	60	100
10万石	10	80	140～150
20万石以上	15～20	120～130	250～300

表1　1721（享保6）年に出された供人数令（『御触書寛保集成』より作成）

ここまでの解説を終えて、改めて［問い］②を考えさせる。多くの生徒は、ある重要なことに気づく。参勤交代が制度化された時、江戸時代は平和な時代になっていたのであり、戦乱が終結しているということである。つまり、戦争に参加するという軍役をおこなうことでの「奉公」を果たす機会が失われているのである。

〈まとめ〉　主人と従者のあいだで結ばれた「御恩」

と「奉公」という関係には、双方に果たさなければならない義務がある。主人は従者の土地支配を認めるという「御恩」を与えなければならない。これに対して従者はこの「御恩」に報いるべく、主人のために戦争に参加する軍役などの「奉公」を果たさなければならない。従者である諸大名には「御恩」として認められた石高に応じた軍役が課せられたが、戦いが大幅に減少したことで軍役を果たす機会が減少することになった。

つまり、参勤交代は軍役に準じる「奉公」として制度化されたのであり、将軍と大名の主従関係を確認するとともに、諸大名を将軍の監視下におくものであった。遠方より江戸にやってくる大名の場合、何日かの宿泊をともなう。大名が通行する道が整備されていくことで交通が発達し、さらに大名が宿泊する本陣などを中心として都市が発展を遂げていく。また結果的に、莫大な費用をかけて果たす奉公のために諸大名の経済力は削減され、軍事力が低下することになったのである。

授業後におきた生徒たちの意識改革

【生徒Aの感想】
中学では習わないところまで詳しく説明していただけたので、とても面白かったです。「参勤交代」制度化の目的を深掘りしたこの授業を機に、今まで当たり前だと思ってきたものは実は違っているかもしれないと思い、自分で調べてみようと思いました。教科書に載っていることが、唯一の正解ではないかもしれないし、歴史が少し好きになりました。

【生徒Bの感想】
中学の歴史の授業では、「参勤交代」について深く調べることが少なかったが、今回の授業を受けて、答えは1つだけではなく、いろいろなことが考えられるのだなということがわかりました。深く物事を考えることで、今まで学んできたこととは違う答えが出てきたので、面白かったです。自分の考えを持つことで、班で話し合うときにいい考えが浮かぶと思いました。これからの授業では1つの答えにしばられるのではなく、新しい答えを探して、もっと深く、詳しく調べることができればいいと思います。

今回の授業実践では、「参勤交代」を取り扱った。参勤交代制度化の目的に対して、誤った認識をもっていた生徒は、その認識を改めることができ、そうでない生徒も、参勤交代の本質への理解が深まったであろう。まずは自分で考え、そしてグループになって他者の意見を吸収しながら、自分の解答を構築していくという作業は、これからの歴史教育の在り方を模索するうえで意味ある活動であったといえる。

総括

歴史という科目は、暗記することがすべてではない。授業後に実施したアンケートで、生徒たちはこのことに気づいてくれた。生徒Aの感想に「今まで当たり前だと思ってきたものは実は違っているかもしれないと思い、自分で調べてみよう」、そして生徒Bのそれに「1つの答えにしばられるのではなく、新しい答えを探してみる」とあることからも、物事を多面的に考えることで新しいものを生み出そうとする創造性を育てることに、歴史教育が貢献できる可能性が秘められていると私は感じた。

歴史を学ぶには常に「なぜ」という疑問をもつことが大切である。私が作成した教材『書いて深める日本史――思考して表現する記述問題集』（山川出版社、2021年）には、歴史を探究していくための問いが用意されている。本書に取り組むことで、歴史を考える力を身につけて欲しい。

（ほんぼ・たいら／東洋大学附属牛久中学校・高等学校教諭）